遠い星からの手紙

岡島重俊
17歳の遺稿ノート

ひとりぼっちの　ぼくは
あなた以外　話す人はいなかった
もう行くの？　お別れだね
あの　さよならっていっていい？
――「さよなら」

草鹿宏 編著

遠い星からの手紙

岡島重俊　17歳の遺稿ノート

昭和五十三年三月　十五日　初版印刷
昭和五十三年三月二十五日　初版発行

編著者・草鹿　宏
発行者・堀内末男
発行所・株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇　郵便番号一〇一
電話（〇三）二二三〇—六一七一（販売部）
印刷製本・廣済堂印刷株式会社
検印廃止・乱丁落丁はお取替えいたします
©1978 H. KUSAKA & S. OKAJIMA printed in Japan 0095-783006-3041

遠い星からの手紙

岡島重俊
17歳の遺稿ノート

草鹿宏 編著

●高一の春休み、クラスメートと奥秩父へ登山……（後列右から３人め）

僕は　死にます
バイ　バーイ
かわいい人よ　さようなら
どうぞ
子どものころの心を
忘れぬようにして

遠い星からの手紙

目次

はじめに　4
第一章　ぼくは大人になりたくない　13
第二章　ただ時の過ぎゆくままに　71
第三章　かわいい人よ、さようなら　125
第四章　遠い星になった少年　159
あとがき　184

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

受験戦争のさなかで、ひとりの少年が自殺した。

少年の名は岡島重俊、十七歳。高校三年になったばかりの初夏、五月二十二日のことである。

彼が通学していた東京都立西高は、毎年東大合格者を数多く出す全国でも屈指の有名校だった。生徒たちは東大を目指して、青春の三年間を受験勉強にひたすら打ち込む。それが彼らの誇りなのだ。

岡島君は公立の中学時代、特に勉強しなくても成績が非常によかった。小さい頃からピアノを弾き、絵を描き、スポーツの選手で、友達の誰からも愛される少年だった。

だが、有名高校へ入学してから、彼を取り巻く状況は一変した。東大出の父親を持つ岡島君は、自分も東大へ進学することを目標とし、家族からも期待されていたが、彼が望む生き方と、受験生の条件とは、あまりにもかけはなれていた。

少年のみずみずしい感受性も、汚れを知らない正義感も、受験戦争の渦中では無力にひとしい。しだいに追いつめられながら、彼は現実という暴力から自分を必死に守るため、ノートに詩や文を書きつづけた。

高二になってすぐ、父の仙台転勤にともなって、彼は、まだ中学生だった弟とふたりだけで、東京に残された。伯父の家の庭にある小さな物置小屋を改造し、そこで慣れない自炊生活をすることになったのである。

どうしても受験体制にとけ込めなかった少年は、じわじわと押し寄せてくる焦燥感に負けまいと、自分を戒め、励まそうとするが、それも弱者の悲鳴に過ぎなかった。

心を打ちあけて語り合う友もなく、遠くに住む両親とも会えず、彼は幼い弟と膚を寄せ合うようにして、孤独な生活に耐えた。やっと買った中古のギターを弾き、好きな小説を読みふけり、過ぎ去った日をいとおしむように、小さな子供をかわいがったのも、彼にとっては生きることのあかしだった。

三年になると、彼はもはや東大受験生としての自己に、破産宣告をしなければならない状態になっていた。受験体制の非人間性を嘲笑し、それを許す社会を鋭く批判しながらも、少年は現実的な力を何も持っていない。

自然は美しく燃えるような新緑の季節だったが、彼の心は暗く行きづまっていた。受験勉強には気がのらず、親友もガールフレンドもいなかった少年の閉ざされた青春に、周囲は誰ひとり気づこうともしなかった。

五月二十日。弟の健治君は学校行事で菅平へ行くため、早朝、兄が寝ているうちに出かけた。その前夜、岡島君は何か議論をしたくてたまらないように、新聞記事を取り上げてかなり熱っぽくしゃべりつづけた。それが兄弟の最後の別れになった。

二十日の午後、岡島君はずぶぬれで家へ帰って来た。晴れた日は自転車で通学していたが、雨が途中から降りだしたのだ。いやな日だった。学校で、実力テストの結果が発表され、彼は国語五十四点、英語三十二点という成績であった。それでも平均点には達していたが、とても東大を受験できるような点数ではない。

物置のトタン屋根を、どしゃ降りの雨が激しくたたく。六畳ほどの板間に二段ベットがあり、勉強机がふたつ並んでいた。彼はその机に向かい、前から書きかけていた『屍車』という作文をまとめあげた。

屍車とは、死んだ子供たちを投げ込んで運ぶための粗末な手押し車で、非情な親方に怒

鳴りつけられながら、その仕事を手つだう「僕」という少年の物語である。

少年自身も、いつ屍車に投げ込まれるか分からない。まさしくその「親方」は受験体制の化身であり、「子供たち」は人間性を抹殺された受験生なのだ。

夜がふけてから、岡島君は近くの郵便ポストまで行った。『屍車』の原稿を、受験生雑誌に投稿するためである。それは翌月の入選作として活字になったが、すでに作者は「殺された少年」になっていた。

五月二十一日。彼はひとりぼっちの部屋で、追いつめられた自分の心と、きびしく対決した。目の前の現実を批判するだけでは、弱者のひがみと思われても仕方ないのではないか？　もう一度、戦う勇気を持とう。

仙台にいる両親の顔が、頭に浮かんだ。自分に期待をかけた父、いつも手紙であたたかく励ましてくれる母。あどけないほど純真に、兄を慕っているひとりだけの妹。

その日のノートに、彼はこう書いている。

「僕は十八歳までにしなければならないことを、いまいろいろと考えている。

東大理科を僕は受験するつもりだ。化学を勉強したいし、昔からの夢であった文学活動

を少しずつおし進めていきたい。
僕はけっして、現実の快楽に溺れて、あるいは将来の自分の社会的地位を、単純なエスカレーターの上にのせることによって、自己をむだにしたくないのです。
あらゆる困難が、僕を待っています。だが僕は、遠くをしっかりと見つめ、敢然と、その困難にぶつかっていきたい。
十八歳は昔の〝はたち〟にあたるが、僕はこの十八歳を新たな人生の起点として考え、そして着々と行動しつつ生きてゆきたいと思う……」
二か月後、彼は満十八歳になろうとしていた。
この日のノートに記された決意が、まさか冗談とは思えない。彼は受験戦争におしつぶされようとする自分の弱さにむち打って、戦う勇気を持ちたいと、真実願ったのだろう。
五月二十二日。彼を知る人びとにとって、永遠に不可解となったこの日は、明け方から濃い霧であった。その霧がようやく晴れた頃、目ざめた彼は、前夜の決意をもはや忘れていたのか？　それとも、みずから撤回してしまったのか？
「いつもの彼と、少しも変わったところはなかった」と、級友たちはいう。そうかも知れ

ない。岡島君が自分の悩みをノートに書きつづっていたことさえ、誰も気づかなかったのだ。彼はいつも、孤独な少年だった。

学校の昼休み、みんなといっしょにソフトボールをした。身長が百八十センチもあり、運動神経には自信があった彼が、その日はめずらしく無気力な三振をした。

夕方、自転車で家へ帰ると、母屋へ行って夕刊に目を通し、しばらく縁側でぼんやりしていたのを、祖母が見ている。その家には、子供のない伯父夫婦と祖母が住んでいたが、岡島君は弟と物置小屋で自炊をし、風呂に入れてもらったり、テレビを見せてもらうほかは、世話にならぬようにしていた。

午後六時頃、彼は縁側から立ち上がり、自分の部屋へ帰った。弟はまだ旅行中だった。それからわずか一時間ほどの間に、突然、彼に何が襲いかかったのか？

七時過ぎ、仙台からの長距離電話を、母屋で祖母が聞いた。岡島君の父親が、仕事の都合で翌日上京するから訪ねるという知らせだった。

祖母は縁側から離れの物置小屋に向かって、「重ちゃん」と二、三回、声をかけたが、いつもすぐに顔を出す彼が、何の返事もない。部屋には電燈がついていたが、てっきりどこかへ出かけたのかと思い込んだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十時頃、また呼んでみたが、返事はなかった。十一時過ぎになって、ようやく不審に思った祖母が庭へおり、離れの戸を開けて中に入ると、異様な光景を見て動転した。

彼は頭からすっぽりとポリ袋をかぶり、急激にシンナーを吸い込んで、すでに絶命していたのだ。すぐ救急車が呼ばれかが、間に合わなかった。

最後の瞬間に彼が書いたと思われる遺書は、ノートをやぶいたものに、かなり乱れた筆跡で、こう記されていた。

「みなさん　お世話になりました

僕は　死にます

バイ　バーイ

五月二十二日　岡島重俊」

さらに判読がむずかしいほどの字で、走り書きがあった。

「かわいい人よ　みな　さようなら

どうぞ　みんなのかわいい心を忘れぬように……
人はみな　子どものころのことは
けっして　忘れぬようにして……」

社会の偽瞞を許し、みずからを欺むかなければ生きられぬ大人にはなりたくない。それに逆らって殺されるよりは、自分で命を断ったほうがましだという、最後の叫びであったのか？　誰に、岡島君の死を責めることができるか？

衝撃を受けて上京した両親は、彼の机の引出しの奥から、三年間にわたって書かれた五冊のノートを見つけ出した。そこには親さえもうかがい知ることがなかった彼の心の内面が、克明に刻みつけられていた。

岡島君は自殺した。だが彼は、この非条理な社会に殺された少年ともいえる。

世の中にいくばくかは「理由なき死」があるとしても、彼の死因を謎のままにすることは、生き残った者たちの卑劣である。少なくとも彼には、死ぬべき動機が存在した。

それを無残な受験戦争での敗退という次元で片づけてはならない。彼は受験までに、ま

だ一年近い時間があり、さらに東大だけが大学ではないという考え方もできたのではないか。受験体制の重圧が、ひとつの原因ではあり得ても、彼を殺した非条理は、この社会のあらゆる場所にひそんでいたのだ。

この本で紹介する五冊のノートに塗り込められた詩と文は、「殺された」ひとりの少年が遠い星から若い仲間たちに送ってきた魂の手紙である。

もし彼に、心を打ちあけられる友がいたら、あるいは、愛し合う恋人がいたら、これほど死を急がずにすんだかも知れない。

青春は、けっしてバラのしとねではないが、傷つきながらも生きてこそ美しい。岡島君も血を流しつつ、強く生きて欲しかった。

その願いも今はむなしいが、『遠い星からの手紙』は、十七歳の少年がこの世に遺した痛ましい「青春のエチュード」として、同時代に生きる読者の胸を打つだろう。

第一章

ぼくは大人になりたくない

ぼくは大人になりたくない

母の手記

重俊がこの世を去ったというのに、きょうもまた、青空の下、風が吹きわたり、陽光がみちあふれています。神様は、最愛の子を死に追いやったこの私を、うんとうんとお苦しめになればよいのに、私の周囲には、あの子が生きていた日々とまったく同じこの輝かしい自然があります。

重俊よ、この広い世の中の、もうどこにもいない重俊よ。お母さんは、どうすればよいの。おまえは、この世の中に愛想をつかして、自然に返ってしまったのね。おまえの苦しみを思えば、お母さんはどんな辛さも何とも思いません。でも、お母さんのこの苦しみだけは、おまえも計算にいれなかったのね。

きょう、はじめて街に出て、仙台の街は相変わらず底ぬけに明るく、風が光り、空は高

かったけれど、街を歩く人々も景色も、みな白っぽく、異様に見えて、お母さんには無縁のものに思われて、光のあふれる中を、お母さんはひとり涙を流しながら歩いてきました。

あの日、五月二十二日の深夜、東京の実家の母から、電話で重俊の死を知らされたとき、全身から血の気がひいて、呼吸がつまり、しゃがみ込みながらも、あの子はふざけて死んだのではないか、と思いました。それほど人を笑わせるのが好きで、日ごろたえず軽口やジョークをとばしていましたし、深刻に考えるそぶりさえも見せない子でしたから——。

あの子は、最後まで受験勉強が手につかず悩みといえばそれが悩みでしたから、ついに自分自身の手で断を下したのかと、あの子の決断のつけ方のあまりの早さに息を呑む思いでした。

しかし、何としても、このまま死んだということが、救われない気持ちでした。はやる心を押えて汽車に乗り、上京して、ひそかに書き綴った五冊のノートを読み終えたとき、あの子は自分の中にこれほど誇り得るものを持っていたではないか、これほどのものを持っていながら、どうしてそれを強くはぐくもうとしないで、死んでしまったのかという疑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com